

2017 年よりインクカートリッジ里帰りプロジェクトを通じて、日本野鳥の会の保護活動へのご支援をいただいています。この報告では日本野鳥の会の 2021 年度の保護活動の成果やトピックをご紹介します。

保護活動トピック

1 絶滅が懸念される野鳥の保護活動

シマフクロウ



■河川や湖沼周辺の森林に生息し、魚を食べる世界最大級のフクロウ。繁殖に必要な大木が森林伐採等により消失し、餌の魚類が河川改修などにより減少したことで数を減らし、現在は北海道に 160 羽程度が生息するのみです。

トピック シマフクロウが生息する森林を購入や協定を結び「野鳥保護区」として保全しています。2021 年度は根室管内に 2カ所合計 16.7ha、日高管内 3カ所合計 25.7ha を新たに保全することができました。

野鳥保護区では毎年ヒナが生まれています。ヒナは約 1 年経つと、親元を離れ、自分たちの生息地を探します。個体数を増やすには、若鳥たちの生息地の保全も必要なため生息適地を探したり、音声調査を実施したり、新たな生息地の発見に努めています。法的な保護がない森は、常に伐採の危険があるため、できるだけ早く発見し、保全につなげられるよう取り組んでいます。

シマアオジ



■北海道で繁殖する渡り鳥のシマアオジは、近年、中国や東南アジアでの乱獲などで世界に個体数が減少し、国内で最も絶滅が危ぶまれている種の一つです。

トピック 2020 年、北海道サロベツ原野に、シマアオジの野鳥保護区を設置したのに続き、昨年は生態や現状を知ってもらうための普及キャンペーンを行うなど、シマアオジの保護活動に注力しています。2021 年度はかつての繁殖地での調査を開始しましたが、残念ながらシマアオジは確認できませんでした。しかし、サロベツ原野以外の場所で、シマアオジが目撃されたという未確認情報もあり、繁殖地の回復に期待が持てます。国際的にもシマアオジの保護意識が着実に高まってきています。保護上の成果確認のためにも保護区や道内での調査を行うと共に、各国との共同調査も継続して行っています。

2 普及活動

ウトナイ湖サンク 40 周年



トピック 北海道のウトナイ湖サンクチュアリが開設されてから、40 年を迎えました。ウトナイ湖は日本屈指の渡り鳥の中継地で、野鳥の宝庫としても知られています。40 年前、全国から一億円の募金を集めて、日本初のサンクチュアリを実現しました。1991 年にはラムサール条約湿地となりました。現在は、法的に守られていない周辺の勇払原野へと保全活動の対象を広げています。ウトナイ湖、勇払原野の保全活動を今後も進めていきますので、引き続きのご支援をお願いします。

ツバメを守るための取り組み



トピック 新たにツバメ観察のためのパンフレットを制作し、ツバメの普及のために無料配布を開始しました。また全国 18 の団体にツバメの見守りに関して感謝状を贈呈しました。これはこの先もツバメと人との共存が続くことを願い、ツバメの巣や生息環境を温かく見守っている団体に感謝状を贈呈する取り組みで、2019 年度から行っているものです。今後もツバメを守るための取り組みを通じて、多くの方にツバメのことを知っていただくことで、社会にツバメを見守る輪を広げていきます。